

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集: 愛宕町教会・総務部 発行者: 北 紀吉 発行所: 甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

みことば

収穫の主に祈る

聖書 マタイによる福音書 第九章三五〜三八節

牧師 北 紀吉

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

主イエスが、町や村を残らず回ってくださったと述べられています。「残らず」って素敵な言葉です。主イエスの行かれないう町はないのです。時を越えて、国境を越えて主の御名が宣べ伝えられる所はどこでも、主イエスが臨在していただくからです。

主イエスは、教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気を癒してくださっています。まずは、神の国を主イエスは宣べ伝えておられます。神の

御子であられる主イエスの到来は、地上での神の支配(神の国)の到来でもあります。

神は、何を持って支配されるのでしょうか。御子を下さったの神の支配とは、慈しみと真実を持つての支配です。武力を持つての、金に物を言わせての支配ではありません。時代の渦に巻き込まれ苦しむ私共を、主の十字架と復活をもって救いたもう神の憐れみと真実による支配です。

主イエスは、憐れみの神として私共のところにおいでくださいました。それゆえにこそ、慈しみなる方として、ありとあらゆる病気や患いにある者を憐れみ(いやし)たもうのです。主の癒しは神の御子としての憐れみです。

★ ★ ★

その主イエスが、飼い主が無い羊のように弱り果てて、打ちひしがれている群衆を見て、深く憐れんでくださったのです。飼い主とは、民の指導者のこと

です。羊は、神の民のことです。本来神の民の指導者は、神からの委託を受けた王ですが、油注がれた王がいなくて民が弱り果て、打ちひしがれていると主イエスは嘆いておられるのです。もちろん民の指導者がいないわけではありません。真実な導き手がいないために、神の委託を受けていない他の人々について行き、苦しんでいると嘆いておられるのです。

神に仕える指導者は、神の栄光を表すのです。それゆえに神の愛したもう民の平安と恵みのために仕えるのです。しかし、神を畏れない指導者は、自分の利益のために民を指導するのです。そこに民の困窮があります。そんな民の困窮を見て、主イエスは嘆かれるのです。主は、困窮の民をこそ神の民と見てくださり、神の憐れみが必要としていてくださると感じておられるのです。ここに、主イエスの民への慈しみがあります。

★ ★ ★

それゆえに主は、弟子たちに命じられるのです。「収穫は多いが、働き手は少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」と。主は、困窮の大きさに、人々の神を求める思いの大きさを覚えておられるのです。

★ ★ ★

「収穫は多い」と言われます。多くの人々が神を、救いを求めていると言われるのです。そして「働き手が少ない」と。神に仕える者が少ない、神の救いのために働き手がもつと必要だと言われるのです。

そして命じられる。福音を宣べ伝える働き手を、神が送ってくださるように祈れど。主は弟子たちに働き手になれとは言わない。祈れということです。あくまでも働き手は神から遣わされるものとしておられるのです。このことは大切です。救い、それは神のものとされることです。そして仕える者は、あくまでも神に仕えるのであって自分を誇ることは無いのです。

更に、たとえ福音宣教の成果が上がらなくても、自らの業ではないのですから、主が、神が責任を取ってくださるのです。遣わされた者に神が共に働きたもう。ですから、神に信頼してひたすらに宣べ伝えることこそ、神の御心です。

★ ★ ★

救いのために働き手が神より送られる。それは、神の慈しみです。福音宣教師が与えられる、それは神の恵みです。神は、誰をも働き手としてくださいます。あなたも、です。祈れとは、神の恵みの業に仕えよとの招きです。

受洗にあたって

信仰告白

信仰告白



宮澤可仕三

「生ある者必ず死に至る」との言葉の通り、私も80歳と、人生の晩年を迎えて、これからどんな死生観に立って歩んで行ったら良いかを改めて考えるようになりました。

その直接の理由は、4年前に脳梗塞になり、言語障害と書くことが不自由など、後遺症が残っている現状です。

また、一昨年には左足の複雑骨折で4ヶ月の入院生活に及んだこと、過去に何回か事故に遭いながら、不思議に大事に至らず守られている現実、妻の口癖の「神さまが守ってくくださるから」という神さまと真剣に向き合ってみようという思いと、

教会の皆様と面識を深めていかなくはという思いで、昨年のクリスマスより礼拝に出させてもらっております。

愛宕町教会は、妻が会員であること、前牧師の鈴木顕栄先生との関係で、愛宕町教会の50年の歴史を第三者の立場で側面より見させてもらった一人です。当初は会員も少なかったと思われる中、教会堂建設の用地取得から教会建設へと大きな偉業を計画し、数年の年月を経て立派に完成されたことは驚異でした。

妻の言い分では「教員が牧師先生を先頭に丸となって神さまに願ひ求め、祈りを積み重ねた結果、私たちの願ひや思いを超えた立派な教会を神さまに捧げることが出来た、あの喜びと感激は生涯忘れることはできない」との言葉が、今になって解ってきました。

この皆様の信仰心と努力の結晶である教会へ仲間に入れてもらうのが何か心苦しく思っておりましたところ、過日、北先生が来訪され、教会生活も一年経ったので洗礼を受けるようにとのお願いがありました。その時は、家族と相談して返

事をしますということで別れました。帰りに先生が聖書の言葉、ペトロの手紙一第5章7節「思い煩いは、何もかも神に任せしなさい。神が、あなたがたのことを心に掛けていてくださるからです」と読んで祈ってくれました。

12月6日の朝、妻に「今日、先生に洗礼を受けると返事をするから」と言いました。妻は「洗礼の出来事は神さまが時を定めて、その人に与えて下さる大きな恵みであるから、感謝して受けることが神さまへの信仰の証しである」と、多分、励ましてくれたのだと思います。

教会でも、役員会の試問会におかれても、全員が喜んで迎え入れてくれたことに、安堵とともに感謝に尽きる思いです。

私の名前は「可仕三」と変わった名前です。当時の時代背景もあってか、「忠、義、孝、よろしく仕えるべし」との意味だそうですね。成人してから名前に恥じないようと、地域社会のためにも自分の出来る限りで奉仕してきました。親孝行もできたと思っております。

先週、日本基督教団信仰告白の学びの中で、三位一体の父・子・聖霊の神であることを知り、この神さまにこそ、残された人生を宜しく仕えて行く所存です。

(二〇〇九年十二月二〇日、クリスマス礼拝にて受洗)

証詞・感話

2009年2月26日 祈祷会

証詞

主はすべてを
備えてくださる

保坂 輝美

何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

《コヘレトの言葉 第3章1節》

今回「証し」ということで、自分自身のこれまでを振り返ってみました。また、婦人会の役を務めさせて頂き聖霊の働きを実感させられましたことについてお話をさせて頂きたいと思います。

皆さんもご存知かと思いますが、私の実家は、母がクリスチャンでしたので、物心ついた時からキリスト教にふれ、家の座敷の鴨居にはイエス・キリストの聖画が飾ってあり、この天地万物は神様が創造され、いつも私たちを見守っていて下さると自然に信じておりました。

子供の頃は、北隣のの中村徳太郎兄の家と1ヶ月おきに家庭集會が持たれ、鈴木顕栄牧師ご夫妻が毎月、甲府から山梨市まで電車で来て下さいました。子供の集會もあり、近所の子供たちに声をかけ讃美歌を歌ったり紙芝居を見たり、イエス様のお話を聞いたりしました。

しかし、神様は臨在すると信じておりましたが「キリスト教とはどんな宗教？」と、人に聞かれても漠然としていて説明できません。理屈めきで神様の臨在を信じて

いましたから……「聖霊によらなければ誰もイエスは主であるとは言えないのです」とコリントの信徒への手紙にあります！

就職前に母に受洗を勧められ1969年12月21日のクリスマスに鈴木牧師より洗礼を受けました。しおりに書いて頂いた聖句が、箴言1章7節「主を畏れることは知恵の初め」でした。

それから就職、結婚、出産とありましたが、当教会の婦人会はいつ頃か分かりませんが婦人会長を年齢順にするという決まりがあり、母はとても心配していたようです。私に会長の順番が回って来るまで生きていられない！三井道子姉に支えてくれるよう、お願いしていたようです。私自身も気になって、できれば役を逃れたいと思っておりましたが、創世記22章「主の山に備えあり」神様は良い助け手として山縣洋子姉を書記として与えて下さいました。神様はすべてを備えて下さり助けて下さるお方だと思いました。

また、今から5年前(2004年)お話は前後しますが、私が副会長の時、有泉美津子姉が会長で古屋律子姉が書記でした。律子姉はご主人のお仕事の関係で東京に転居してしまったのですが、東京で婦人会のプログラムを作り、電車を持って来て下さったこともありました。都合が悪く来られない時もあり、メールで私の所に送って下さいました。その少し前まで、私はパソコンを持っていませんでした。使い方も知りませんでした。丁度、息子が学校の関係でパソコンの買い直しが必要となり、思いがけなく貰うことができました。ルカによる福音書11章9節に「求めなさいそうすれば与えられる」とありますが！普通、専業主婦の私には必要ないものですが、心の片隅で求めています。使い方も息子に聞きながら簡単な文章は作れるようになりました。字の下手な私にとっては、どんなに助かったか……これが1年遅ければ必要が満たされなかったと思います。「何事にも時がある」とコヘレトの言葉3章1節にあります。パソコンが与えられたのは婦人会のため、神様が与えて下さった恵みと思って感謝しています。

それから、今年も3月6日(金)に世界祈祷日が南甲府教会に於いて開催されますが、2年前(2007年)

の山梨教会での世界祈祷日が思い起こされます。分区委員の有泉美津子姉が当日は仕事で出席できないことから、会場で読む式文の箇所を区切って下さって「誰だれはここからここまでを読んで下さい！」と決めて下さいました。

当日、山梨教会の礼拝堂に入り、何か神秘的なものを感じました。皆さん、一応は教会ごとですが、それぞれ好きな所に座りました。私は「いつも式文を読む時は式文を読む順番に座っていたのに仕方ないな？」と思っておりました。暫らくして定刻になり讃美歌練習をして式が始まりました。愛宕町教会の式文を読む順番が来ました。初めに清藤和子姉、渡邊春美姉、古屋律子姉、私、北眞智子姉、平塚浜子姉。何と座った順が式文を読む順番になっていたのです。これには大変驚きました。大概、教会では着席する時は前から順番に座るのに、後ろの席からひとりも飛ばすことなく式文が読まれたのです。自分の読む箇所は分かっているも順番は誰も知りませんでした。考えてみますと、後ろの人から読む方が前の人に良く聞こえて良いのでは！偶然と言われる方もいるかと思いますが、聖霊が働いて下さっているのと思えませんでした。

それからもう一つ、婦人会で新年度のおすすめ当番を決めるのに当たって、竹本多賀子姉が暫らくお証しをしておりませんでしたので、お願いしようと思っておりました。ただ、体調が悪く婦人会を休まれているので、お願いしてもどうかかな？との思いもありました。けれども、2007年4月に予定させて頂きました。竹本姉も体調に気をつけ、おすすめの当番の日に備えて下さいました。そして、お話を聞いて驚きました。

神様の導きによって、娘さんの船木あゆみ姉が、教会に来るようになったいきさつを聞かせて頂きました。こんなに嬉しく喜ばしいことを皆さんに聞いてもらいたい、伝えたいと思っていたようです。娘さんは翌年1月に洗礼を受けられました。聖霊の導きによりおすすめをして頂き、主の恵みを聞かせて頂いて良かったです。

神様がこのように、教会の方たち一人ひとりに働いて下さっています。一人では何も出来ませんが、それぞれに助け手を与えて下さいます。

私たちは見過ごしていますが、神様の御業が常に働いて下さっていることを感じます。教会の交わりの中で皆さんを通してこのような経験をしたのは初めてです。驚きと同時に主の恵みと導きに感謝しています。

2008年4月23日 祈祷会

証詞

嫁(むすめ)美幸のこと



井波 忠志

北牧師と長男・真希との思いがけない電話から、その出来事は始まった。嫁の美幸が勤務先から車で帰宅途中、意識不明に陥り救急車で運ばれ入院し、生死の境にあるということ。一瞬、私にはその意味がわかりませんでした。

それまで美幸の脳に何らかの異常があるということを知り、本人はもちろん周囲も全く気付かない突然のことでした。息子の話では生死は半々、もし命を取り留めても植物人間になるだろうという話。祈りました、というより叫びました。「植物人間でも何でもよい、美幸の命を支えて欲しい」と。

不思議だったことは、それまで「美幸さん」だった関係がいつの間にか「美幸」と呼び捨てにしていたことでした。良く話し合う夫婦で、真希も自分がクリスチャンであること、キリスト教についてたびたび話していたようです。北牧師が時々言うてくださる「なんじの隣人を愛せよ」という愛唱聖句もその話し合いの中で伝えられ、受け止められたものと思います。

皆様の祈りと厚い看護にもかかわらず、2年前の7月28日美幸は召されました。美幸の死が持つ意味などということは、とうてい凡人の私にはわかりませんが、その死に至るまで、その後を通じて家族がキリスト教、教会

に多少なりとも触れ合う時が与えられたこと、また、その葬儀では一度も福音を聞くことのなかった300人近い人々が教会の門をくぐり、牧師のメッセージを聞く機会が与えられたこと、また、真希もその死と直面する中で自分の信仰生活の在り方を見直す時を与えられたことなど、思い起こすと考えさせられることが多くあります。

感謝していることは、その結婚式から始まって、入院、葬儀、納骨、そして現在に至っても北牧師が言葉に表せないくらい良く支えてくださったこと、また教会員の方々にも父・母が問題を抱えて何の働きもできない中、温かく支えてくださり力を添えてくださったこと、何とも御礼の申し上げようがありません。本当にありがとうございます。

唯、御名があがめられ御心がなりますように。

2008年6月25日 祈祷会

証詞

主の恵み



兩宮 恵子

私の家は仏教でキリスト教とは無縁の家でしたが、叔母2人がセブンスデーの信徒でした。私も、友達の家で、その関係の土曜学校をしていたので、行っていました。

その頃覚えた讃美歌「主われを愛す」「まもなくかなたを」は今でも心に残っています。その頃から「神は唯一の神である」ということを自覚していたのだと思います。というのは、母はとても熱心な仏教徒であり、生まれ年の守り神を信じ、そのため私が高校受験の時、その守り神を祭つてある神社にお参りに行けと言われ、こんな神じゃないときき思い、ただただ私は唯一の神に祈った覚えがあります。高校受験に合格し、母はお礼参

りに行けと言いましたが、絶対行かないと断わりました。組分けの試験の日、熱を出して行けなくなると母はすかさず「罰があたった」と言っていました。

看護学校では、聖書研究会があり、所属していました。が、あまり熱心ではなく、年に数回出席しただけでした。その後、蔵市立病院に勤務するようになりました。

勤務して間もなく、市職員の運動会がありました。そこへ行く途中、教会があり、「あれ、ここは看護学校の時、聖研をリードしてくれた人が行ってる教会」だと思い、もう運動会もそこそこに、すぐ教会へ行きました。礼拝は終わり近く、新来者紹介で「暇があつたら来ます」と言い、それから毎週行くようになりました。

それから数カ月してから、特別伝道集会があり、その話の中で「神を神としないことが罪であること」（詩編139編13節）から、私は神に造られたものであることがはつきりと示されました。そして22歳になる2日前に蔵福音自由教会で洗礼を受けました。

それから2年8カ月後、神奈川の厚木に開拓伝道をするることになり、信徒7人が任命され、私もその一人に加わりました。

そしてそれから8年後、信徒のお母さんの紹介で健さん（夫）とお見合いをし、（健さんの方はお父さんの戦友がお世話してくれました。キリスト者が良いとのこと、教会へ行き、探してくれたそうです）悩みながらも、

「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない」

《マタイによる福音書 第7章11節》

のみ言葉にすがり、結婚を決めました。

愛宕町教会へ来て、26年、教会学校の奉仕・婦人会奉仕をさせていただいていますが、充分ではなく、申し訳なく思います。

仕事の面では、看護師という仕事を与えられ、今の職場に25年勤務できているのは、神様の恵み以外のなものでもないことを、深く思われます。生死に関わる仕

事ゆえに、祈りなくして出来ない仕事です。通勤の車の中で祈ります。その時その時「神様どうすればよいのでしょうか、良い知恵を与えてください」と祈ります。「点滴が入りますように、主の御心はどこにあるのでしょうか」等々、いつも祈っています。今も「神様、あの方の具合を守って下さい」と祈り「大丈夫ですね」と聞き、歩んでいる日々であります。

2009年8月27日 祈祷会

証詞

3つの慰め



小林 俊子

新改訳のほうが私にとってはなじみが深いため、新改訳で読ませていただきます。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは天地を造られた主から来る。

《詩篇 第121編 1〜2節、新改訳》

主の御名を讃美します。私は30余年前、東京から山梨県へ転居してきました。東京の家を片付けながら、荷物を少しずつ車で山梨の家に運びました。

季節はいつ頃だったでしょうか。初夏の頃だと思えます。お天気のとてもしよい日でした。いつものように荷物を車に積み、中央自動車道を山梨に向かって走っていました。景色がどんどん変わり、緑の山々を縫うように走っていました。そのあまりの美しさに、突然、涙がぼろぼろとこぼれてきました。私は確かに、その時、山の向こうからこのみ言葉を聞きました。

母と二人の山梨での暮らしは穏やかなものでした。し

かし数年後、母は病を得、闘病生活に入りました。病は深刻なもので余命3ヶ月と診断されましたが、その後6年間、主に守られ、病床洗礼を受けることができました。そして私の腕の中で天に召されました。

母は、アイバンクに登録していました。すぐに角膜が提供され、また少しでも医学に貢献したいとの母の意志により、献体いたしました。母亡き後、しばらくは色々な手続き等で気も紛れておりましたが、やはり時がたつと、母を失った悲しみが増してきました。

そんな折、知り合いの宣教師夫人からお手紙を頂きました。その中に「私たちの家はあなたの家でもあります。いつでも、朝でも夜でも夜中でも、何かあったらすぐに来なさい。私たちの家のドアはいつでもあなたのために開いています」の一文があり、悲しみの心に一条の光が差し込んできました。

その後、友人からの手紙には、「おかあさんは、美しい花を見るのが大好きでした。きつとお母さんから角膜を頂いた方は、今美しいものをいっぱい見ているのでしょうか」とあり、これも大変慰められました。

病院から母を連れてきた時は、荷物をそのまま病室に置いてきましたので、後日引き取りに行きました。ナースステーションにご挨拶に伺った時、私はあまり見覚えのない若い看護師さん呼び止められました。その方は、理由は分かりませんが、看護師を辞めようと思っていたそうです。でも、母を担当した時、人工肛門を実際に見たことがないと言ったその看護師さんに母はパジャマとパジャマを脱ぎ、「よく見て。よく見て、良い看護師さんになってね」と言ったそうです。その方はわたしに「看護師を絶対に辞めません。一生この仕事をします。ありがとうございます」と、お話しして下さいました。病院で母は多くの方々に支えられておりました。また母自身、若い看護師さんを励ますことができたことは、これもまた大きな私への慰めとなりました。もちろん他にも多くの方々に支えていただきました。が、今思うと、山々を越え、山梨県に來たその時に、すでに神様から先んじての慰めを与えられていた、なんと幸いなことかと、あらためて感謝いたしております。

2009年10月29日 祈祷会

証詞

感謝



北 眞智子

中学生の頃、私は若さと弱さから人間不信になり、人間に失望し、修道院の何たるかも知らずに、その生活にあこがれたりしました。高校3年生の夏に出会ったある人を通して、後に、神様は主イエス・キリストを指し示して下さいました。

25歳の時、初めて金沢の若草教会のクリスマス礼拝に出席し、その後一年おいてから一年間の求道生活の後、27歳の時に大阪住吉教会のクリスマス礼拝において洗礼を授けていただきました。翌年春には神学校を卒業した北と結婚、夫が伝道師として遣わされた大阪の茨木教会へ一緒に移りました。

受洗したばかりで何もわからない私でしたが、主任牧師ご夫妻がとても親身に指導してくださり、何も責任を持たずにただ受洗したばかりの一信徒として、とても新鮮な気持ちで新しく知ることの全てが素晴らしく希望に満ちて、守られて教会生活をさせていただきました。

4年間の茨木教会での教会生活を終え、静岡県清水教会へ主任牧師として遣わされた夫と共に参りました。茨木教会よりずっと小さな教会で、それは私にとってあこがれていた修道院にも似た、たまたまでした。しかし、担任教師の妻であった時と違い、主任牧師の妻としての生活は、それはもう何もできないのに無我夢中でこなすしかなく、授かっていた3人の子供たちを育てながら、牧師館はそれなりに、しかし実は、教会のご用は何も出来なかったのです。

訳もわからずに忙しい12年間の過ぎ、次にこの愛宕町教会へ遣わされました。14年目になりました。こちらに

来て、子供たちにあまり手がからなくなつたこともあって、自分の信仰生活を初めてきちんと自覚しながらなしていくことができるようになったと思います。今でも自分が教会でなすべきことは何なのかを常に思考錯誤しながら、主に問いながら、主に仕えているつもりです。本当になにも知らず、何も出来ない私が、30年近くも牧師の妻としてみ恵みの内に生かされてきました。何もできず嘆く私に牧師である夫は「それでいいんだ。何も出来なくていいんだ」と言い続けてくれました。それなのに今は、その頃と比べれば少しは教会というものがわかってきた私は、反対に相手の足りないところを責め、不満を口に出しているなんて、なんと罪深いことでしょう。主はそのままの一人ひとりを愛してくださり、与えて下さった賜物を主のために捧げることが喜んで下さいます。自分を無にして、ただ主におすがりし、祈る時に、どんな素晴らしい思いもよらない恵みをいただくことか。今まで何度も経験しました。自分を卑下することは高ぶることと同じことだと、主人に言われました。

「わが恵み汝に足れり」

《コリントの信徒への手紙二第12章9節、文語訳》
「わたしの恵みはあなたに十分である」と、主は教えて下さいます。また、
「彼は傷ついた筆を折らず、／くすぶる灯心を消さない。」

とあります、感謝です。
《マタイによる福音書第12章20節》

愛宕町教会で思いがけなく、私の母が信仰を与えられ、洗礼を授けて頂きました。私にとって信じられない程の喜びでした。茨木教会においても、私の家によく来ていた妹が、茨木教会の教会員の青年と結婚し受洗へと導かれ、その子供たちも受洗しクリスチャンホームを与えられています。

私は今、私の父が亡くなった年齢になりました。末娘の優香が生まれたばかりの頃、病を得た父は、優香を抱いてフラフラと清水教会の祈祷会をしているところへ入ってきました。父の人生を考えると、きつと一番主の救いを必要としていた人だったと思います。それからすぐ、一年半の闘病の末逝去しました。陰府にまでくだって下さった主が必ず父を救い出して下さると信じていま

す。祈り続けたいと思います。私共の子供たち3人も信仰が与えられ、本当に恵みの内に生かされ、それぞれの歩みをしています。決して楽な選択をしていない子供たちで心配ですが、主が共にいて下さり、それぞれのあり方で主に仕えて行ってくれると信じます。私は私の分だけからも仕えて行きたいと思っています。

先に申し上げたように、母教会には一年しかいられませんので、私には大阪住吉教会、茨木教会、清水教会、そして愛宕町教会の4つの教会が全て母教会のように入ります。幸せなことです。

特に、今年はある出来事を通して、自分がいかにこの愛宕町教会を自分の教会として愛するようになっていくかを改めて知らされました。古谷優さんという方を私はあまりよく知りません。一度偶然お会いしたことがあっただけです。今年6月に亡くなられました。ご家族はあろうことか亡くなられた後までも転会を希望され、私は猛烈に腹が立ちました。古谷優さんは若い頃この教会に導かれ、ご兄弟やご友人をこの教会に導き共に教会生活をされていた。しかし、何らかの理由でこの教会を離れられて20年近くも経ってしまったそうです。でもきつと救いに入れられたこの教会に対するご本人の熱い思いは変わっていません。私は信じています。そしてなによりも、この教会にとつてそんな優さんはとても大切な信徒なのです。この教会から天に籍を移された、そう思うのが一番納得できることなのです。愛宕町教会の逝去者として覚えられるべき人なのです。このことを通して、私は自分がいつの間にかこの教会をとても愛していることに気づかされたのです。主が建てられた愛宕町教会を守って来た人々たちを覚えます。

その方々にも信仰の戦いはそれぞれあったことでしょう。しかしいつもこの教会を愛し祈り、奉仕し、信仰を引き継いでこられました。今、私たちにそのような熱い思いはあるでしょうか。いい気持ちが弱くなるときもあるでしょう。しかし一人ひとりが支えあって、祈禱会に集い教会の祈りを熱くし、次の世代へつなげていかなければならないと思います。

幸いこの教会には子供たちがたくさん与えられています。本当に愛しい子供たちです。希望です。強い人も弱

い人も支え合って教会を守って行きたいと思っています。

「イエスは言われた。『わたしは命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。』」

愛宕町教会の担任教師として赴任して

荒又敏徳

この拙い者の文章を読んでくださる皆様の上に主なる神の祝福と平安がありますように。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働く」ということを、わたしたちは知っています。」ローマ8・28

2010年3月末を待たずに尾鷲教会での2年の牧会に終止符を打ち、山梨県笛吹市八代町の妻の両親の家に住まうこととなり、思いがけなくも愛宕町教会の北紀吉牧師はじめ、教会員の皆様の温かいご配慮のもと、4月より担任教師として赴任させていただきました感謝しております。

愛宕町教会には駆け出しのころより大変、お世話になってまいりました。ここで補教師試験、正教師試験を受け、准允と按手とを受け、教師として立てられることの恐れと光栄とを感じることができましたし、その後もつねに祈りに覚え、支え続けていくべきだと思っていることを思い感謝のほかありません。鶏が先か、卵が先か、の議論がありますが、教会と教師の関係を自らのこととして考えるとき、やはり教会が先であることを改めて思うものです。信仰者は教会を通して産み出されるのですし、その働きのために労苦する者もまた、教会の中での兄弟姉妹との交わりと祈りによって育てられる者に他ならな

主のみ恵みの内に生かされ、満たされていることを、そして終わりの日の救いの約束に与かっていることを心から感謝いたします。

いと言えましょう。

また、北牧師より多くのことを教えられています。その中で改めて初心にかえり、この時期にしかできない説教を聞くことに思いを凝らしたいと願っています。けれども生活のためにアルバイトをしなければならず、礼拝や集会において疲れて眠ってしまうことも多いことを残念に感じます。そればかりではなく役員会、CS教師会、婦人会などの集会に加えていただく中で、共に教会にとつて大事なことに思いを寄せていくことの大切さを感じています。今、新たな任地への歩みをと願い、祈っていますが、ここで吸収できることをできるだけたくさん、貪欲に吸収して次につなげていきたいと思います。妻のことですが今、市立甲府病院に通院しながら過ごしています。また、子供たちも八代での生活をそれぞれに充実させようと苦心しながらやっています。

愛宕町教会の兄弟姉妹の祈りと励まし、そして支えがあつての今日ただ今であることを思いつつ、ここで与えられております夕礼拝での説教、教会学校中学科での説教などの奉仕に心から務めてまいりたいと日々、祈っています。また、許される限りの集会に集い、主にある交わりを重ねさせていただきたいと思っておりますので、短い間ではあります但しよくお願いいたします。

矢崎 裕兄を偲ぶ

山本昌昭



1966年（S41）年4月、私は日川高校から甲府南高校に転任になった。校務分掌は第2学年担任であったが、そのときの学年主任が矢崎さんだった。これが矢崎さんとの出会いであった。私にとって学級担任はこれが最後になったのだが、矢崎さんは我々の上司として学年経営に敏腕を振るっておられた。

第2学年がスケート実習のため、八ヶ岳パンテスコープというところに出かけたときのことであった。初めて履くスケート靴で氷の上をおっかなびつくり歩く私を見かねて、矢崎さんがそばに来てくれた。左足で氷を蹴るときは体重を右足に乗せ、右足で氷を蹴るときは体重を左足に乗せ、これを反復すれば体はおのずと前に進むことになるのだと、実演しながら教えてくれた。そこで私も早速やってみて見事に転倒、右足くるぶしあたりに亀裂骨折を起こしてしまった。矢崎さんが右足、左足と交互に体重を移し替えながら軽快に滑るので、私にも出来るように思ったのが失敗のもとであった。

矢崎さんは1953年（S28）山梨大学英文科を卒業し、県内の高校教師として採用された。最初の赴任校は甲府商業高校であったが、ここで生涯の伴侶となる女生徒に出会うこととなった。羽中田幸枝さんがその人である。彼女は1956年（S31）高校卒業と同時に日本銀行甲府支店に採用された才媛であった。4年後の1960年（S35）10月、2人

は結婚し、1962年（S37）4月長女千絵さんが、1966年（S41）には長男尚さんが誕生した。

勉強家の矢崎さんは英語教師としての研鑽を積むため、結婚前の1950年代、県からの派遣学生として東京教育大学（現筑波大）に内地留学、結婚後の1963年（S38）にはフルブライト交換学生としてサンフランシスコ州立大学に留学した。当時フルブライト留学試験は超難関とされ、この試験にパスした各分野のエリートが1年もしくは数年間アメリカで研修を積む制度であった。今でこそ外国留学の門は大きく開かれているが、当時は極めて狭き門だったのである。このころが彼の得意の時代、輝いた時代ではなかったかと思う。

先に長女千絵さんに触れたが、彼女は両親のすぐれた遺伝子を受け継いで見事筑波大学に進学した。しかし好事魔多しというか、ここで統一協会という異端の宗教の罠にかかり、抜き差しならぬ境遇に陥ってしまったのであった。矢崎さんご夫妻の苦悩はいかばかりであったろう。当事者でなければとうてい理解できない程の深刻なものであったようだ。

愛宕町教会の教会会報「いずみ」復刊第22号に矢崎兄は次のように書いている。「私が真剣にキリスト教と向き合ったのは、娘が統一協会に入ったことを知り、何とか救出したいと家内とともに飛び回っているところのことでした。そして幸運にも鈴木顕栄

先生の知遇を得て、木曜夜の祈祷会に夫婦で出席を許されてからでした。（中略）今回自分の傲慢さ、罪深さを聖霊さまが気づかせて下さり、信者の一人として下さったと思い、ただ感謝でした」。

ご夫妻の熱心な祈りがきかれ、千絵さんは統一協会を脱会することができた。矢崎さんは、「娘のおかげでキリスト者になれた」と言って感謝していた。

矢崎さんは、1996年（H8）1月愛宕町教会定期総会において役員に選出されてから10年間、会計役員として奉仕された。このことのためにどれほどの時間を過ぎ込まれたか知る人ぞ知るところである。

このほか、忘れてならないのは、愛宕町教会60周年記念誌の編集長として立派な記念誌を残されたことである。パーキンソン病という難病と闘いながら聖書に親しみ祈り、主から与えられた人生の馳せ場を立派に走り通して主のみもとに召された。

矢崎さんが愛した奥様、ご家族様の上に主の慰めとお守りがありますよう祈るばかりである。



2006年秋、
バザーの折の矢崎裕兄

2009 年度夏期伝道実習報告

感謝

東京神学大学学部4年

栗山 尚典



主の御名を讃美いたします。この度は、主の導きのもと、愛宕町教会で夏期伝道実習の時があたえられましたことを、心より感謝申し上げます。愛宕町教会の皆様、大変お世話になりました。沢山の奉仕の場を与えて下さり、感謝致します。説教奉仕、家庭集会、聖書研究祈祷会、その他お話等、未熟な語りに付き合っただけで頂きありがとうございました。38日間における実習の出来事一つひとつが私の財産となるでしょう。

昨日までの実習を振り返りますと、一瞬の出来事のように感じられます。慌ただしく夏期伝道実習に突入し、落ち着く間もなく終わってしまった。と言いますのも文部科学省の御達しで、今年度から大学の学事歴の変更が余儀なくされました。今頃ゆとり教育のしわ寄せがきたのでしょうか、授業期間が大幅に増えたのです。そのようなこともあって、24日の大学の講義を終え、その足で教会の夏期キャンプに参加するという、せわしない実習の幕開けとなったのです。牧師として福音伝道に携わる者の生き様が暗示されているかのようにあります。常日頃から臨戦態勢を整えておけ!!と。折が良くても、悪くとも福音を宣べ伝える。このような姿勢が問われている気がしました。

私は、夏期伝道実習に先立ってある思いを抱いておりました。それは自己が打ち砕かれて、古い自分を打ち壊すというものです。ですから、実習先が愛宕町教会と決まった時には、正直、良き訓練の場が与えられたとの思いでした。北牧師の伝説や、色々な噂を聞いており、多少の不安もありましたが、それ以上に期待が大きかったのです。ただ、唯一心配であったことは、説教、奨励の奉仕回数が他の実習先に比べて圧倒的に多いということでした。そして事前の準備が満足に出来ずに実習日の初日を迎えることとなりました。

実習が開始されてからは、辛いとか悲しいと思う暇もなく、ただひたすら「御言葉との格闘」ととなりました。「神の恵みを語る」ことの大変さを、身をもって知る良い機会となりました。そして、何よりも、「御言葉に聴く」という姿勢が大切であるということ。人は自身の思いや解釈という先入観を持っていますから、御言葉に聴いているつもりでも自分の言いたいことを語ってしまうのです。それは、私においては、顕著に見られたのです。また、福音を語っているつもりでも、どこか律法的になってしまう。このことに気付かせて頂いただけでも、「神の恵み」を語ることを志す者として、感謝なことです。

家庭集会でも、率直なご意見を頂いたことは今後の励みとなります。どのような思いをもって説教を聞いているのか。牧師に何を求めているのか。「骨身に沁みる」までには至りませんでしたが、「恵みを語る」ことの大変さを痛感させられたのです。これも、私自身が主イエスの罪の赦し、その恵みを、しっかりと受

け止めていなかったからです。ダルクの集会に参加させて頂き、他者の罪の告白を聞いて原点に返らされた思いになりました。私の説教や奨励に「実存」が欠けていることの理由が、少し分かった気がします。人を恐れていたのです。人の目を気にしていたのです。どこか、「イイ」人間になりすまそうとしていたのです。マタイによる福音書10章26節に「人々を恐れてはならない」とあります。私がいかに、神のみを見ていなかったのか。いかに神に信頼しきれていなかったのかを痛感させられました。これは、良い意味で北牧師を見て感じて感じました。規格外の人でありました。ありのままの自分である。それでいいのだ。そして人を恐れない。だから、人との深い交わりを持てる。間近で見ていて、自分の欠けに気付かされました。ありのままの自分である。等身大の自分である。その自分を主に受け入れられた。だからこそ、主イエスによる罪の赦しの恵みを深く感じる。この一連の出来事を、深く受け止めていなかったのかもしれない。それ故、説教で「神の恵み」が語れない、実存がなかったのです。

当初思っていたように、古い自分を打ち壊すことは出来ませんでした。ただか一月程度では、今迄染み付いた自分を変えることはそう簡単にはできないのです。しかし、この実習を通しておぼろげではありますが、光明が見えてきました。愛。それは関わりである。神を畏れるから人を恐れない。神との関わり。主との交わりがあるからこそ、人との交わりがある。深い交わりがある。「嫌ってくれてありがとう。そうやって私と関わりを持って下さるんですね」という言葉。牧会者としての生き様がそこに表れていた。目の前にある一つひとつの出来事を信仰の目を持って捉え、考えていく。これこそ、神学であったのです。エピソードを挙げればきりがありませんが、これらの一つひとつの大切なことに気付かせて頂いたことは、何よりも神から与えられた恵みでありました。愛宕町教会で夏期伝道実習が出来たことも、主の導きであったように思われます。主に感謝いたします。

そして、いままで指導して下さいました北紀吉先生ありがとうございました。色々気に掛けて下さった眞智子夫人、食事ごちそうさまでした。食事に誘って下さった方々、楽しい話しや証しを聞けて恵みの時となりました。また、家庭集会を開いて下さった皆様ありがとうございました。忙しい中食事も用意して下さい、大変感謝です。CSの子どもたち遊んでくれてありがとうございました。愛宕町教会の皆様の祈りによって支えられ、励ましの言葉によって慰められました。本当にありがとうございました。この度の夏期伝道実習が恵みのときとなったことを、改めて、主と愛宕町教会の皆様に感謝いたします。